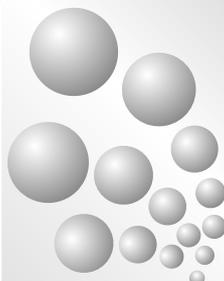


五月の空に、35機の熱気球

「佐久バルーンフェスティバル」参加記



熱気球の魅力は？ バナーを長く炊いて、静かに離陸するあの瞬間がたまらない。「地上の時間」から浮上して、ふわりと「風の時間」に身をゆだねる快感が……。

五月晴れの佐久（長野県）の空に、35機のバルーンが浮かんだ。

中央大学OBチームも参加した「佐久バルーンフェスティバル」（5・3―5）。

私はライセンスをとったばかりの、パイロットの卵。運営スタッフの二人として参加した。

学生記者 町田梨絵 Ⅱ 商学部1年

午前4時。いつもより早く目を覚ますと、すぐカーテンを開ける。

「よし、風はない。今朝は飛べる」パイロットトレーニングを始めてから、一日の始まりがそんなふうになった。

5月3日からの3連休は長野県の佐久市で過ごすことが家の年中行事だ。ここで、「佐久バルーンフェスティバル」が開催されるからである。しかし、ことしから私自身の大会への取り組み方が少しばかり変わった。この春に熱気球のパイロット

になったのだ。とはいっても、パイロットとしてエントリーしたわけではない。そのためにはまだまだ修行を積んで規定飛行時間（この大会では50時間）をクリアしなければなら

ない。いままで、大会の役員をしている両親の手伝いで、会場の運営やボランティアオブザーバーとして参加していたが、ことしはあるチームの一員として参加することになったのだ。でも、役割はチーム出しオブザーバーで、去年とやることは似たようなものだが……。

のべ15万人、熱気球も最多

午前5時半、岸野会館着。日本中から集まったバルーンチームの車が駐車場にあふれる。ここで、競技委員会からフライトのための情報提供と競技内容の説明がある。ことしエントリーしたのは熱気球35機（チーム数も同じ）。これまでで最多である。熱気球の大会はたくさんあるが、ティアスタッフで支えられているが、この大会の、競技委員は主に佐賀大

学の学生である。もちろん熱気球クラブのメンバー。私たちと同年代の学生が3日間で15万人以上もの集客を誇る、佐久市のイベントの重要なスタッフとして活躍しているのだ。佐賀大の学生ばかりではなく、気球に魅せられた大勢の人達が運営し、また競技に参加して観客を魅了するのだ。

フリーフィングが終わり、いよいよ会場へ。初日の朝、私は地元チームのオブザーバーとなった。オブザーバーとは、各チームに派遣される競技委員で計測などジャッジを行う。公正を図るため他のチームに付くのである。

さて、会場入りというところで、さっそくアクシデント。観客の車渋滞で、競技車両が会場内になかなか入れないのだ。11年前、初めてここ佐久で大会が開催されたときは、熱気球を知る人さえほとんどいなかったのに……。地元のパイロットたち

にはうれしい悲鳴である。会場に着くとすでにたくさんのお客が熱気球を待っていた。

競技開始——「風」を読み、

マーカーをターゲットへ

車から下ろされた気球はまず、バスケット（人が乗るところ）のセッティングから始め、エンジンともいえるバーナーのチェック。そして球皮、つまり風船の部分を地面に広げる。



茶色の地面に色とりどりのカーペットが敷かれたようだ。やがて、競技委員長のエアホーンの合図で、インフレーション（気球を膨らませる作業）が始まる。

いよいよ競技開始。風を送りこんだ球皮はまるで生き物のようにムクムクと起きあがる。何度かバーナーの大きな炎を吹き込むと、高さ20メートル以上の巨大な風船が立ち上がり、あちこちから歓声があがる。

ターゲットへ向かって、Take off !!

さあ、離陸準備OKだ。のんびりとした雰囲気の中にも各チームに緊張が……。パイロットがバーナーを何度か長く炊いて、炊いて……。やがても静かに熱気球は離陸した。この離陸の瞬間は他のどの乗り物よりやさしくて、静かで、不思議な感じがして、誰もが始めて飛んだとき感激する。

さて、気球の競技はその高さや早さを競うのではなく、どれだけ風下にあるターゲットに近づくことができるかを競うのである。なぜ風下かという点、熱気球は風まかせに進むからだ。高度によって吹く方向や強さが違う「風」を選び、気球をターゲット目指して「操縦」していくのだ。

そのためには風をよむ経験と勘、そしてどれだけ自然と仲良くなれるかが必要となってくる。ターゲットの

上空にさしかかると小さい砂袋にリボンをつけたマーカーとよばれるものを投下する。当然、中心に近いものの勝ち。はたから見れば自由気ままにのんびりと飛んでいるような熱気球も実は空の上でパイロットたちは、熱い戦いをしているのだ。簡単にそうに聞こえるかもしれないが、気球の競技は自然相手（風）なので一筋縄ではいかない、奥の深いスカイスポーツなのだ。よく、多くの方から、「熱気球はどこへ行くのですか？」とか「何時ごろ飛んできますか？」という質問を受けるが、「だいたい……」とか「たぶん……」という返答になってしまう。でもこれはバルーニストがいかげんなわけではない。

「風待ち」

午前のタスクを終えその報告をするために、また岸野会館へと戻った。



まずバスケットを車から下ろして。気球は中に畳まれている

ところだった。

外を見ると木々が心地よく揺れている。気球はとても風に弱い乗り物なので、人間が心地よいと感じる風でも飛ぶことができないのだ。風が弱まるまで競技は延期となった。いわゆる「風待ち」だ。季節の変わり目、この時期は午後よく風が吹く。結局、午後のフライト

トは中止になってしまった。

初日の競技を終えて私の所属チームの水上パイロットが1位。やったあ——

夜。ウェルカムパーティーでバルーンストたちは親交を深める。佐久の名物鯉こくや地酒に酔いしれて……。

中大OB号も健闘

とホッとついウトウト、やがて爆睡してしまった。気づいたら2時半。午後のブリーフィングが始まる

2日目、私は中央大学OBの「や



大空へ。気ままに飛んでいるような気球でも、パイロットたちは熱い戦いを繰りひろげている。

確な指示を出している。

このクラブのようにほとんど全員がパイロットというチームも少なくない。チームプレイなのだ。私もいつか、気の合う仲間と共にこんなふうに参加に出場したいと夢を馳せる。

2日目の夜はバルーンイリュージョン。観客に一番人気のあるイベント。

イロットデイクレアドゴール。パイロット自身が決めた一人一人違ったゴールへと向かっていく。パイロ

音楽と夜の気球のコラボレーション……とても幻想的でまるで絵本のページのようなだった。



音と光のファンタジー。「バルーンイルージョン」

最終日、午前中の競技でこの大会も終了。結果はなんと私の所属したチームの水上パイロットが優勝!!

念願の優勝に体の大きい水上孝雄さんも飛びあがって喜んでいる。私の気球の師匠が優勝したのでこれまでで一番印象に残る大会となった。表彰式が終わり、みんな次の日から普

段の生活に戻っていく。また次の大会で会うことを約束して……。

気球をやっていると多くの人との出会いがある。北は北海道から南は九州まで、そして海外のブルーニストたちともたくさん知り合いになれた。私のような大学生、お父さんお母さんに連れられてやってきた子供

と私は思っている。

中大「LARK」の先輩たち

30年前、父（町田耕造）はここ中大摩校舎で探検部の仲間たちとともに熱気球を作っていた。空への夢をふくらませて……。そして10年後、中大に「LARK」（熱気球クラブ）誕生。中央大学で熱気球にたずさわった人数は100人を超えるという。いまも細々と歴史は続いているのだ。

生活だけではなかなか出会うことのできない年の離れた人たちやいろいろな環境の人たちと出会い、また仲間となる。これが気球をやっていると、なによりすばらしい財産だ

今回の大会にもたくさんの中大OBの方々が参加している。セミナーでたくさんパイロットを育てている島村孝治さん。10人乗りの気球のオフィシャル・パイロット、越井馨さん。裏方ではあるが、競技の結果を毎回毎回正確に出している卵月武雄さん（この人がいなくてはみんな競技ができない）。そして2日目に私がオブザーバーとしてついた

「やんやんバルーンクラブ」の先輩たち。今回の優勝チーム水上さんのクルーとして大会に参加した山崎能啓さん（山崎先輩にはこの春私がパイロットトレーニングを受けている時たいへんお世話になった）。今回は参加していないが二児の母親で生後2カ月の赤ちゃんを連れて競技に出場している最も前向きで超競技志向の女性のパイロット馬場智子さん。たくさんの中大の先輩たちが活躍している。私はそのことを誇りに思う。

さあ一緒にテイク・オフ

中大生となつたいま、中央大学の熱気球の歴史と伝統を消すことなく続けていくことが私の役目のような気がする。これから一人でも多くの人に熱気球を知ってもらい、風となり、空へと舞い上がる喜びを共に味わいたいと思っている。

さあ、一緒に、Take off!!